

二〇二四年度 桐朋女子中学校入学試験 (B入試)

筆記試験 (国語)

受 験 番 号

氏 名

【注意】

- 一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。
- 二、問題冊子は1ページから18ページまであります。
- 三、「はじめてください」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。
- 四、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 五、問題冊子に書きこみをしてかまいません。
- 六、「やめてください」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙も問題冊子も表を上にして、机の上におきなさい。
- 七、試験時間は四五分間です。

一、次の①～⑩の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。また、⑪～⑮の——線部の読みをひらがなで答えなさい。

- |             |                     |
|-------------|---------------------|
| ① キュウキョクの目的 | ② 落とし物をヒロウ          |
| ③ 銀行にヨキンをする | ④ セイジツな人            |
| ⑤ 書画のメキきをする | ⑥ サクインで言葉を調べる       |
| ⑦ 友達をマツ     | ⑧ 政治的なシンジヨウを聞いて判断する |
| ⑨ ナイカクが成立する | ⑩ 食品のエイセイ管理に気をつける   |
| ⑪ 温度を一定に保つ  | ⑫ 時計の短針             |
| ⑬ 手提げぶくろを買う | ⑭ 奈落の底              |
| ⑮ 真面目な性格    |                     |

二、次の(1)～(5)のことわざの意味として適切なものをI群の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。また、それぞれのことわざと似た意味を表すことわざをII群の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ群から同じ記号を二度以上答えてはいけません。

- |                                 |     |                              |
|---------------------------------|-----|------------------------------|
| (1) 転ばぬ先の杖 <small>つえ</small>    | I 群 | ア 貴重なものでも価値のわからない者には無意味であること |
| (2) 河童の川流れ <small>かわわらわ</small> |     | イ 手ごたえがないこと                  |
| (3) のれんに腕 <small>うで</small> おし  | ウ   | 不運の上に不運が重なること                |
| (4) 泣きっ面に蜂 <small>はち</small>    | エ   | 達人であっても時には失敗すること             |
| (5) 猫 <small>ねこ</small> に小判     | オ   | 用心深く物事を行うこと                  |

## II 群

ア 石橋をたたいて渡る  
イ 弱り目にたたり目  
ウ ぬかにくぎをさす  
エ 猿も木から落ちる  
オ 豚に真珠

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合、「、」や「。」等も一字と数えます。

① 権力者が人々を操あやつろうとするとき、「無知は力」となります。自分の頭で物事の本質を考えようとせず、政府やメディアの言うことを I 鵜呑みにして動く人々は、 \* 為政者にとっては支配しやすい存在です。

逆に、人々が意思を持って生きようとするとき、「知識は力」となります。自分で考える力と正しい情報があれば、「えらい人が言っているから、言うことを聞きなさい」「みんながやっているのだから合わせなさい」などと言われても、恐れずに自分の考えを貫くことができるのです。

知識がないばかりに権力者に振り回されたり、いやいやブラック企業にしがみついて生きていかなければならないのは、あまり楽しいことではありません。それよりも自分の頭で考えて自由に生きていく方が、よほど面白いのではないのでしょうか。このことがわからず、II 無機質な暗記や詰め込み教育の結果、勉強嫌いになってしまいう人が多いのは、残念なことです。

人が学ぶのは、学校で良い成績をとるためでもなければ、偏差値の高い学校に行くためでもありません。学ぶことは、自分の人生の選択肢を増やすことです。その結果、人生をより自由に生きられるようになります。そのために僕たちは学び続けるのです。

学ぶことには年齢も関係ありません。

今でも世界中の女性に絶大な人気を誇るファッションブランド、シャネルを創業したココ・シャネルには、こんな言葉があります。

「私のような学校も出ていない、年をとった無知な女でも、まだ道端に咲いている花の名前を一つぐらいは覚えることができる。一つ名前を知れば、世界の謎が一つ解けたことになる。その分だけ②人生と世界は単純になっていく。だからこそ、人生は楽しく、生きることは素晴らしい」

シャネルがこの言葉を残したのは80歳になるうとする時期でした。ビジネスで大成功をおさめ、パリの最高級ホテルで暮らしていたときのことです。富も名声も手に入れながら、なお学ぶことをやめなかったのです。

③この言葉に、学ぶことの本質が凝縮されていると思います。学校に行ったり、分厚い本を読むことだけが学ぶことではありません。この花の名前はなんだろう。そう思って調べたり、誰かに聞いて知ることができれば、それも学ぶということになります。

学ぶことにゴールはありません。誰かにほめられるために学ぶわけでもありません。たとえ学校に行かなくても、学び続けることはできます。

ひとつの物事を学べば、ひとつ世界が広がります。それは人生を美しく、豊かなものにしていきます。いくつになっても好奇心を失わず、学びを止めないことが、人生をより良く、面白いものにしていく一番の方法です。

(中略)

④ いま、みなさんがスキー場にいます。雪質もコンディションも最高のゲレンデです。そしてみなさんはスキー級の免許を持っています。楽しみ方は2つあります。思いきりスキーを楽しんでもいいし、そのへんに寝転がって、スキーをする人たちをぼーっと見ていてもいい。みなさんは、どちらが楽しいと思うでしょうか。

学生にこう聞くと、ほとんどの人が「思いきりスキーを楽しみたい」と言います。中には、ぼーっと眺めていたいという人ももちろんいます。

どちらでもかまわないのです。ただスキーの技術を身につけていれば、スキー場に行ったとき、どちらの楽しみ方がいいか、自分で選ぶことができます。今日は元気だからガンガンすべろうとか、昨日すべりすぎて疲れちゃったから、今日はのんびり眺めていようかなというふうなんです。別にスキーを学んだからといって、やらなくてもいいのです。でも、もしスキーができなかったら、そもそも選ぶことさえできず、すべる人をボーっと見ていることしかできません。

これはスキーに限ったことではありません。

何かを勉強するということは、自分の人生の選択肢を増やすということです。何かひとつでも学べば選択肢が増えます。選択肢の多い人生の方が楽しいと僕は思うのです。

人間なんて、いいかげんな生き物ですから、将来、気持ちなんかどう変わるかわかりません。だったら、とりあえず学んでみる。そうすることで、将来の選択肢がひとつ増えるかもしれない。僕はそういうスタンスを取っています。

サッカーやラグビーのワールドカップが放映されていても、ルールがわからなければ、大の男が走り回っているとしか思いませんが、ルールを勉強すれば選手のかげひき、戦略などもわかり、試合を楽しむことができますから、最高にエキサイティングな時間になります。

満天の星空を見上げたとき、知識がなければ、ただの無数の光だと思いかもしれません。けれども、星座表の読み方を知っていれば「あっ、オリオン座が見えた」と思うことができますし、星座の由来となったギリシャ神話を読んだことがあれば、サソリに噛まれて死んでしまった狩人オリオンの悲劇を夢想することができます。天文学の本を読んだことがあれば、「あの星から地球に光が届くまで何年もかかるのだな」ということもわかるでしょう。

人の一生は、どんなに長くても百年ちよつとです。王様でも一般人でも一日は24時間しかありません。同じように平等に与えられた時間の中で、目にする情報量は、それほど大きく変わらないでしょう。しかし、学ぶことによって、目の前の世界が何十倍、いえ何千倍、何万倍にも広がっていきます。

選択肢が増えるということは、「武器」が増えるということです。

「函谷関の鶏鳴」という中国の故事があります。孟嘗君という貴族がいて、たくさんの食客を抱えています。食客というのは、さまざまな能力のある人物を客として迎え入れて、食事や住居の面倒を見る代わりに、何かしら働いてもらうというものです。

あるとき、孟嘗君が秦の国の昭襄王という王様に呼ばれて出かけていきます。秦はのちに中国の最初の皇帝となる始皇帝を生んだ国ですね。

すると昭襄王は「こんな優秀なやつを生かしておいたら、将来、秦の敵になってしまいかもしれん」と言っていて、孟嘗君を閉じ込めてしまいます。孟嘗君は食客たちといっしょに逃げ出しますが、国境まで逃げてくると、門が閉まっています。当時、中国は、大きな壁で囲まれていて、夜は門番が見張りをし、自由に出入りできないのが普通でした。

追手が迫る中、どうしようかと困っていると、食客の中にいたものまねの名人が「私が鶏のものまねをしましょう」と言っていて「コケコッコー」と鳴きました。それがあまりに上手なので、近くにいた鶏たちが朝がきたと勘違いして一斉に鳴き始め、門番はびっくり朝がきたのだと思い込んで門を開け、孟嘗君たちは逃げおおせることができたのです。

⑤ この故事からもわかるように\*スキルや、知識があれば、思わぬところで窮地を脱することができるともあります。

でも、どんな能力が役に立つかということとは、そのときになってみないと誰にもわかりません。ですから、いま興味あることや好きなことを、ひとつひとつ勉強していけばいいのです。

(出口治明『なぜ学ぶのか』小学館)

\*為政者——政治を行う権力を持つ人

\*スキル——技能

問い一、——線部Ⅰ「鵜呑みにして」、Ⅱ「無機質な」について、ここでの意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「鵜呑みにして」

ア そのまま受け入れて

イ すっかり無いことにして

ウ 周囲の人に広めて

エ ねじ曲げて

Ⅱ「無機質な」

ア ていねいで完ぺきな

イ 単調で作業的な

ウ 難解でたいくつな

エ 高度で専門的な

問い二、——線部①「権力者が人々を操ろうとするとき、『無知は力』となります」とありますが、これはどういうことですか。最も適切なものを、次の中から選び記号で答えなさい。

ア 無知の人は権力者のもので、より大胆だいたんに自分の人生を貫くことができるということ

イ 知識のない権力者は、誰からの影響も受けずに人々を支配しやすくなるということ

ウ 人々が権力者のもので意思をもって生きようとするには、知識は邪魔じゃまになるということ

エ 権力者にとって、ものを学ぼうとしない人々は非常に支配しやすい存在であるということ

問い三、——線部②「人生と世界は単純になっていく」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次の中から選び記号で答えなさい。

ア 何を知らないのかが明らかになるから。

イ 一つの謎が解決し、わからないことが減っていくから。

ウ 一つの謎の解決が世界のすべてを理解することになるから。

エ 知るべきことと知らなくてもよいこととの境目がはっきりするから。

問い四、——線部③「この言葉に、学ぶことの本質が凝縮されていると思います」とありますが、ココ・シャネルの言葉からうかがえる学ぶことの本質とはどのようなことですか。次の一文の空らん当てはまる適切な表現を本文中からぬき出して答えなさい。ただし、「Ⅰ」、「Ⅱ」は一語で、「Ⅲ」は十字以内で答えること。

「Ⅰ」や状況じょうきょうや学び方は関係なく「Ⅱ」をもって学び続けることは人生を「Ⅲ」にするということ。

問い五、——線部④「いま、みなさんがスキー場にいるとします」とありますが、筆者がこのような仮定をしたのは何を示すためですか。最も適切なものを、次の中から選り記号で答えなさい。

- ア 今の学生がどのようなスキーの楽しみ方をするのかの調査結果を示すため
- イ スキーの楽しみ方については、二つの選択肢があることを読者に示すため
- ウ スキーの技術を身につけていれば楽しみ方を自分で選ぶことができるということを示すため
- エ スキー1級の免許を持っていると雪質の良さやコンディションがわかることを示すため

問い六、——線部⑤「この故事からもわかるように、スキルや知識があれば、思わぬところで窮地を脱することができるともありません」とありますが、

- (1) この故事で役に立ったのはどのようなスキルですか。簡潔に答えなさい。
- (2) 孟嘗君はどのような点で優れていたと考えられますか。簡潔に答えなさい。
- (3) この故事をふまえて筆者が読者に伝えたかったのはどのようなことですか。

問い七、この本のタイトルは『なぜ学ぶのか』です。(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 筆者はここに示した本文の中で、『なぜ学ぶのか』ということの理由について、どのように説明していますか。十字以内で答えなさい。

(2) (1)で答えた理由を実感したあなたの経験について、具体的に書きなさい。

四、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合、「、」「や」「。」「等も一字と数えます。

小学五年生の唯人のクラスでは、老人福祉施設を訪問して大型紙芝居をすることになった。代表でありさつをする人を決める際、里菜に役をおしつけようとしたクラスの女子のリーダーである文香と、それに反対する転校生のアズは激しく衝突し、アズは教室を飛び出してしまった。

学活の時間になると、アズは「Ⅰ」教室にもどって来て、だまって席にすわった。

「先生え、代表は里菜ちゃんがやってくれるって言うてます」  
文香が報告する。

「ほんまに？ あいさつしてくれるの？」

みのり先生に聞かれて、里菜はうなずいている。

「そう。何事も経験ね。チャンスやと思っただけでがんばってね」

先生には、里菜が自分から立候補したわけではないとわかっているみたいだ。

「みんなもそれでええんよね？　じゃあ、里菜さん、あとでいっしょにあいさつを考えましょう」

「どういういきさつで決まったのかたずねることもなく、先生ははげますように里菜に声をかけていた。」「じゃあ、大型紙芝居を仕上げましょう。今日で完成できるといいわね」

代表決めの必要がなくなったから、みんなが大型紙芝居の色をぬることになった。四年生するとき、国語の教科書にのっていた「ごんぎつね」の話だ。

クラスのみんなは担当した場面に分かれて作業を始めた。アズの話は、なんとなく警戒けいかいしているよ  
うで、《Ⅱ》見るだけで、だれも声をかけなかった。

机を四つ合わせて、その上に紙芝居を広げた。絵の具を溶といていると、アズが唯人のとなりに来た。

「頭冷やしてきた。けど、あたしは謝らない」

アズは唯人に向かって何かを確認するみたいに言ってきた。唯人はちょっと笑って、アズに筆を手わ  
たした。

あっぱれやな。文香にあそこまで言ゆうやつなんか、めったにおらんぞ。

すまして色をぬり始めたアズの横顔に、唯人は語りかけた。もちろん、心の中で。

「なあ、ごんのしっぽ、おかしくない？」

里菜が近づいてアズに声をかけてきた。

「その絵、昨日うちが描かいたんやけど、しっぽが大きおっ過ぎちゃうかな」

「そんなことないよ。上手に描かけてるわ」

「ありがとう」

里菜とアズはならんで色をぬっていた。唯人は《Ⅲ》して、となりの机で作業をした。

「なんか、ごめんな。うちのせいで文香とけんかになってしもて」

「ちがうわよ。やり方が気に入らなかつただけ」

里菜は、アズが自分を助けようとして文香にあんなふうに言ったんだと思ったようだ。なら、そういうことしておけばいいのと思った。アズは思ったことをはっきり言わないと気がすまないらしい。

「里菜ちゃんさあ、いつもだまって引き受けちゃうでしょ」

「えっ？」

「うん。どうしていやって言わないのか、不思議でたまらないわ」

「うちはええねん。もめるのがきらいなんよ」

「①あたしと真逆だ」

「そうなん？」

「まるくおさまったらそれでいいなんてあたしはいやよ。がまんできない」

「アズちゃんって、すごいな。うちとは全然ちがう。けど、うち、まねもできひん」

里菜は筆を洗いに行つて、そのままもどらなかつた。またひとりになつたアズは、口を《 IV 》結んで色ぬりを続けている。

なんでやる。放ほつとかれへん。

唯人は、みどりの絵の具をパレットで作ると、アズのそばに持つて行つた。

ちらつと顔をのぞきこむと、アズはため息をついた。

「あたしね、金沢かなざわにいたときは、なやむことなんか何もなかつた気がするの」

急に何を言ゆうてるんや？

アズは筆を持ちかえて、ごんの足元に、《 V 》草を描き足した。

「小さいころはね、何も考えなくても人と仲良くいられた。でも、本当はそう思っていただけで、だれとも仲良くなんかしてなかったのかもしれない。そう思う」

仲良くってなんやねん？ 唯人はこたえられなかった。

アズは自分の居場所をうまくつくられへんのやな。

まあ、おれも人のことは言えんけど。

ええとこまでいくのに、あとちょっとのところでこわしてしまふ。悪いくせや。そんなんしてたら、自分が一番キズつくんやろな。

やっぱりアズのことを気の毒に思えた。

数日後、紙芝居の練習が始まった。

好きな場面を選んで分担を決めることになった。

人気なのは、ごんがクリを持って行く場面で、希望者が多過ぎてジャンケンをした。唯人はどこでもいいと思っていたから、空いているところを読むことになった。同じ場面になったのは、綾乃あやの、浩也ひろや、アズだ。

「初めてだからゆっくり、正しくね。慣れてきたらセリフを言うみたい<sup>に</sup>に気持ち<sup>を</sup>をこめて読みましよう。あとから聞き合<sup>って</sup>感想を言<sup>って</sup>もらいますよ」

先生が言うと、それぞれに集まって読み合わせを始めた。

よかった。会話が多いところは難しそうや。地の文ならふつうに読めばええんや。いけそうや。

そのときはそんな気がした。でもちがった。

前に出てみんなに聞いてもらうことになる、声が小さいとか、ぼう読みだとか、ダメ出しされるかもしれない。急に唯人はこわくなってしまったのだ。

少し練習をしてから、場面ごとに前に出て発表した。すぐに唯人たちの番になった。

最初は綾乃だ。

「ある秋のことでした。二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました。雨があがると、ごんは、ほっとしてあなからはい出ました。空はからっと晴れていて、もずの音がキンキンひびいていました」

二番目は浩也。

「ごんは、村の小川のつつみまで出てきました。あたりのすすきのほには、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水がどっとましていました」

② よけいなことは考えないで「ごんぎつね」に集中した。浩也の声を聞きながら、文字を目で追っていると、あっという間に唯人の番になった。

「ただのときは水につかることのない、川べりのすすきはぎのかぶ、か、かぶが……」  
しまった。つかえてしまった。

一度失敗すると、ものすごくきんちょうする。唯人がドキドキしてかたまっていると、  
「かまへん。かまへん」

浩也が小声でいっしょに読んでくれようとした。

「よっしゃ、いくで。せーの」

「ただのときは水につかることのない、川べりのすすきはぎのかぶ、か、かぶが……」

あかん。無理や。

完全にアウト。浩也、すまん。

唯人はその場からにげだしたいと思った。

みのり先生のほうをちらっと見ると、仕方ないわねという顔をした。唯人は先生に目でうったえて、ろうかに行けた。にげだしてしまったのだ。

おれはなんでこんなことができひんのやろ。

今までにも何度か、唯人はこんなふうに教室を出てしまったことがある。とにかく、ろうかに出てひとりで気持ち落ち着かせようとした。

唯人がぬけると、アズが自分の分担当を読み始めた。

「ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうっと草の深い所へ歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。『兵十ひょうじゅうだな』と、ごんは思いました」

③ ろうかでアズの声の聞こえていると、情けない気持ちになった。そのあと、またグループ練習になると、教室のみんなが紙芝居を読む声が、わちゃわちゃとひびいてくる。

こんなとき、\*洋ようちゃんがおったらええのに。きつと助けてくれるし、最初からおれと同じグループになってくれたに決まってる。洋ちゃんがおらんでも、せっかく浩也がいっしょに読んでくれたんやから、それに合わせればできたはずなんや。

いつ教室にもどろうかと考えながら、ひざをかかえてすわりこんでいると、  
「すねているの？」

アズが近寄って来た。

教室から勝手にぬけだして来たみたいだったけど、唯人をおかえに来たわけではないようだ。見ると、こわい顔をしている。

「どうして読まなかったの？ 唯人くん、いつもそうしているの？」

聞かれてもこたえられない。読みたいのにうまく読めなかったなんて言えやしない。

だまっている、アズは大きな声を出した。

「ねえ、どうして読まなかったの！ にげだすってどういうこと！」

いきなり、ものすごいけんまくだ。

教室の窓からみんながチラチラと見てきた。

唯人はそういう子や。おこったらあかん。

見のがしてやれよ。そっとしといたらええやんか。

そんな目線だった。

アズはうで組みをして、唯人につめ寄ってくる。何か言わないといけなかった。

「う、うん。ど、どうしてって言われても……」

しどろもどろになってしまった。

いつものアズはこんなにおこったりはしない。唯人がだまっていると、すぐにあきらめてくれる。本読みの途中とちゅうでにげだした唯人によっぽど腹が立ったのだろうか。

「決めたとおりに読めばいいじゃない！ 難しいことなんて何もなくていいよ」

またバクハツや。アズは言い出したらとまらへんみたいや。いくらなんでもこんな言われようをするなんて、おれ、カッコ悪過ぎるで。どないしたら許してくれるんや？

アズにさんざんしかられていて、

「もう、そのくらいで。ね」

みのり先生が手招きをした。

唯人が立ち上がって教室にもどろうとすると、先生がろうかに出てきた。

ほんの二、三分間のことだったけど、先生は唯人とアズのやり取りを見ていたようだ。

「④ 八つ当たりしたらあかんのよ」

アズははっと我に返ったように静かな顔になった。

八つ当たり？ アズはおれに八つ当たりしとったんか。

「唯人くんが何か悪いことをしたんとちがうでしょ？」

アズはこくんとうなずいた。

「あたし、腹が立ってしまって。そしたらもうどんどんふくらんで」

「何がふくらんだの？」

「自分のことがきらい。きらい、きらいって、どうしようもなくなってしまふの」

「どうしてきらいなの？」

「だってあたし、人にやさしくできないんだもの。今日だって唯人くんがこまっているのに、こんなに

おこっちゃって」

アズは少しだけなみだ声になっていた。

「そっか。どうしたら自分のこと、好きになれるんやろうね」

みのり先生に言われて、アズはうつむいてしまった。

「きつとこたえが見つかると思うわ。このクラス、おもしろいんやから。ねえ、唯人くん」

え、えっ。

急にふられて、唯人はあせった。

先生はおれに何と言ってほしいんや？

いい返事を思いつかなかった。

帰り道。学校坂を下りて行くと、<sup>⑤</sup>空にふたをしたように重たい雲が広がっていた。いつかじいちゃん<sup>いくも</sup>と見た凍雲だ。冬が近いとこんな空になるらしい。

自分のことがきらい。

アズは言<sup>ゆ</sup>うてた。

おれかて、今日は自分のことが残念でたまらんよ。

学校でだれかにおこられるなんてこと、今までただの一度もあらへんかった。ずけずけとふみこんできたのはアズが初めてや。ピンチのときは、いっつも洋ちゃんに助けをもらうか、みんなに見のがしてもらうかしてきたんや。

けど、なんかちやうで。おこられたんはショックやったけど、そればかりやない。今まで知らんかった。こんな気持ち。

<sup>⑥</sup>唯人の胸の中で黒いけむりのようなものがくすぶって、外に出たがっている。あの雲みたい。

(志津栄子『雪の日にライオンを見に行く』講談社)

\*洋ちゃん——唯人のいとこ。いっつも唯人のことを気にかけてくれているが、今年はちがうクラスになっちゃった。

問一、空らん《 》I Vに入れるのに最も適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上答えてはいけません。

ア きゅっと      イ しれっと      ウ ほっと      エ ちらっと      オ すっと

問二、——線部①「あたしと真逆だ」とありますが、これはどういうことですか。解答らんに合う形になるよう答えなさい。

問三、——線部②「よけいなこと」とありますが、これは具体的にどのようなことをさしますか。最も適切なものを、次の中から選り記号で答えなさい。

ア すらすらと上手に読むことができた綾乃と浩也がうらやましいということ

イ あいさつをする役割をおしつけられた里菜がやっぱりかわいそうだということ

ウ 転校してきたばかりで自分の居場所をうまく作ることができないアズは気の毒だということ

エ うまく読むことができずに、みんなからダメ出しをされるかもしれないということ

問四、——線部③「ろうかのアズの声を聞いていると、情けない気持ちになった」とありますが、なぜ、唯人はアズの声を聞いていると情けない気持ちになったのですか。四十文字以内で答えなさい。

問五、——線部④「八つ当たりしたらあかんのよ」とありますが、アズは本当は何に腹をたてていたのですか。答えなさい。

問六、——線部⑤「空にふたをしたように重たい雲が広がっていた」とありますが、これは唯人のどのような気持ちを象徴した表現ですか。本文中の言葉を用いて二十文字以内で答えなさい。

問七、——線部⑥「唯人の胸の中で黒いけむりのようなものがくすぶって、外に出たがっている」とありますが、ここから唯人のどのような気持ちが読みとれますか。九十文字以内で答えなさい。

